

保育者養成校学生の講義前後における 「社会福祉」に対する印象の変化

Change in the Impression about the "Social Welfare" in Junior College Students of Nursery Teacher Training Course

田中 結香
TANAKA Yuka

概要

本研究では、保育者養成校学生の「社会福祉」の講義受講の前後における「社会福祉」の印象を比較し、今後の「社会福祉」の講義において効果的な教育方法を検討する一助とすることを目的とした。A短期大学で、2022年度前期に「社会福祉」を受講した学生のうち、第1回の講義開始時および第14回の講義終了後において「社会福祉」に対する印象について自由記述を求め、研究への同意を得た学生108人のテキストデータを分析の対象とした。分析には統計ソフトKH Coder (Version:3.Beta.05b)を使用し、計量テキスト分析を行った。「社会福祉」に対する印象の総抽出語はおよそ2.5倍、異なり語数はおよそ2倍となった。語彙数が増えたことは、知識の獲得を意味する。具体的には、【対人援助による生活支援】、【問題解決】、【少子高齢化による相談援助】、【傾聴】といったソーシャルワーク技術に関連する印象が増え、相談援助の重要性が理解されたことや、【保護者の子育て不安】、【虐待や貧困の家庭】といった社会問題も重要であると認識が深まったことが推察された。

I. 緒言

保育士養成課程における教科目には社会福祉があり、社会福祉における相談援助や利用者保護にかかわる仕組みの理解を目標として挙げている。内容に相談援助とソーシャルワークが追加され、保育分野におけるソーシャルワーク機能の重要性が示唆されている。しかし、「学生は保育ニーズが保護者や家庭、地域を対象とするものだとはあまり考えていない」¹⁾と言われており、保育士養成課程における「社会福祉」の意義が浸透しているとは言い難い。

一方で、子育て環境をめぐる課題が山積している。まず、「児童虐待の増加」があげられる。若年妊娠や望まない妊娠、養育者の精神疾患、社会

的孤立などが要因として浮かびあがっており、子育てにかかわる専門職や関係機関等が連携し情報を共有しながら虐待防止に努める必要がある。2つめに「離婚やひとり親家庭の増加」があげられる。離婚による生活の変化が、子どもの生活・発達に大きな影響を及ぼしていることも指摘されるようになってきている。離婚を経験するなかで感じる感情をともに受け止め、語り合い、適切な自己像や将来像を描けるよう支援していくことが求められている。3つめに「子どもの貧困と格差の世代連鎖」があげられる。現在我が国の子どもの貧困率は13.9%と子ども7人に1人は相対的貧困の状態にある。特にひとり親家庭、若い親の家庭、親の就労形態が1年未満の契約や内職などの有期雇用である場合に、貧困率が高くなっている²⁾。

子ども家庭福祉における相談援助をはじめ、ソーシャルワークは、知識や対応方法を学修したからといって最前線のソーシャルワークにすぐに対応できるものではない。上述のような課題に保育の現場で直面する可能性は高く、その際に社会福祉の知識や技術を活用する場面は少なくない。様々な保育ニーズに対応するためには、「社会福祉」で学ぶ知識や技術は重要であり、基本的な相談援助とソーシャルワークの学修は保育者としての専門性を高める要因にもなり得る。

そこで本研究では、保育者養成校学生の「社会福祉」の講義受講の前後における「社会福祉」の印象を比較し、今後の「社会福祉」の講義において効果的な教育方法を検討する一助とすることを目的とした。今後質の高い保育者の養成にもつな

げることをねらいとしている。

II. 方法

A短期大学で、2022年度前期に「社会福祉」を受講した学生115人のうち、履修放棄した学生を除き、第1回の講義開始時および第14回の講義終了後において「社会福祉」に対する印象について自由記述を求め、研究への同意を得た学生108人のテキストデータを分析の対象とした。また、内容の解釈をする際には、全講義終了時に確認した、社会福祉の講義に対するリアクションペーパーの内容も参考にした。

講義内容については、毎回の講義テーマと具体的な内容を表1に示した。

表1 社会福祉の講義内容

回数	講義テーマ	講義内容
1	オリエンテーション「保育士・幼稚園教諭における社会福祉の意義」	・社会福祉という科目は何を学ぶのか及び社会福祉を学ぶ意義の理解
2	第1部：社会福祉の意義と歴史の変遷① 「現代社会と地域生活」	・地域や家庭内で起きていることへの認識や身近な社会情勢への理解
3	第1部：社会福祉の意義と歴史の変遷② 「社会福祉の理念と概念」	・社会福祉の構成要素と基本構造 ・社会福祉を支えている思想
4	第1部：社会福祉の意義と歴史の変遷③ 「欧米と日本の社会福祉の源流と展開」	・社会福祉の源流及び発展と展開 ・社会福祉三法及び社会福祉六法
5	第1部：社会福祉の意義と歴史の変遷④ 「子ども家庭支援と社会福祉」	・子ども家庭福祉の特性及び家庭支援と社会福祉 ・保育士の倫理
6	第2部：社会福祉の制度と実施体系① 「社会福祉の制度と法体系、社会福祉行財政と実施機関」	・社会福祉の法体系 ・社会福祉に関連する行政機関
7	第2部：社会福祉の制度と実施体系② 「社会福祉施設と社会福祉専門職」	・社会福祉施設の種類と役割 ・保健、医療、福祉に関連する専門職
8	第2部：社会福祉の制度と実施体系④ 「社会保障及び関連制度」	・社会保障とは何か ・社会保障に関連する制度
9	第3部：社会福祉における相談援助① 「相談援助の理論」	・相談援助の定義と意義 ・保育に必要な相談援助
10	第3部：社会福祉における相談援助② 「相談援助の対象と方法」	・相談援助の方法と技術（事例検討と演習）
11	第3部：社会福祉における相談援助③ 「相談援助の展開過程」	・相談援助の展開過程（事例検討と演習）
12	第4部：社会福祉における権利擁護 「権利擁護の視点と方法」	・成年後見制度と日常生活自立支援事業 ・権利擁護を行うシステム
13	第5部：社会福祉の動向と課題① 「少子高齢化社会における子育て支援」	・少子高齢社会への対応 ・社会的包摂の実現に向けて ・地域福祉の推進
14	第5部：社会福祉の動向と課題② 「社会における福祉的な課題を考える」	・少子化・待機児童・児童虐待・子どもの貧困について、保育士、幼稚園教諭の視点で考える
15	定期試験	
16	総括講義	・保育士、幼稚園教諭の視点から、社会福祉の必要性を総合的に考える

分析には統計ソフトKH Coder (Version:3. Beta.05b) を使用し、計量テキスト分析³⁾を行った。分析方法は、対応分析及び共起ネットワーク分析とした。

研究における自由記述の使用については、学生に対して、研究の主旨と内容、方法、結果の取り扱い、匿名性の保持、研究協力を辞退する権利等について文書及び口頭で説明した上で、同意の意志を確認し、同意が得られた場合に同意書を作成した。研究結果の公表にあたっては、個人名・組織名が特定されないよう匿名化し、データの管理についても鍵のかかる場所に厳重に保管した。また、本研究は、山梨学院短期大学研究倫理委員会において承認を得た（承認番号2022002, 2022年4月6日）。

Ⅲ. 結果

(1) 総抽出語数と異なり語数

それぞれの自由記述の内容をテキストファイルにして、KH coderで読み込み、総抽出語の数及び異なり語数の確認を行った。第1回目の講義時に確認した「社会福祉」に対する印象の自由記述における総抽出語数は1,018語であり、異なり語数は277語であった。第14回目の講義時に確認した「社会福祉」に対する印象の自由記述における

総抽出語数は2,556語であり、異なり語数は526語であった。

(2) 語の抽出と頻出語

それぞれの自由記述の内容をテキストファイルにして、KH coderで読み込み、テキストから自動的に語を取り出して頻出語の確認を行った。第1回目および第14回目の講義時に確認した「社会福祉」に対する印象の自由記述中における頻出語のうち、上位10語を示す(表2)。第1回目の講義時に確認した「社会福祉」に対する印象の自由記述における上位10語は、「人」、「高齢」、「社会」、「支援」、「介護」、「生活」、「困る」、「助ける」、「サポート」、「ボランティア」であった。第14回目の講義時に確認した「社会福祉」に対する印象の自由記述における上位10語は、「人」、「社会」、「支援」、「福祉」、「生活」、「困る」、「子ども」、「解決」、「相談」、「援助」であった。第1回目と第14回目の講義時における「社会福祉」に対する印象の双方に挙げられていた語は、「人」、「社会」、「支援」、「生活」、「困る」であった。第1回目のみに挙げられた語は、「高齢」、「介護」、「サポート」、「ボランティア」であり、第14回目のみに挙げられた語は、「福祉」、「解決」、「相談」、「援助」であった。

表2 「社会福祉」に対する印象の頻出語と出現回数

第1回			第14回		
頻出順位	語	出現回数	頻出順位	語	出現回数
1	人	64	1	人	142
2	高齢	40	2	社会	100
3	社会	34	3	支援	75
4	支援	31	4	福祉	56
5	介護	28	5	生活	54
6	生活	26	6	困る	43
7	困る	24	7	子ども	42
8	助ける	21	8	解決	32
9	サポート	20	9	相談	32
10	ボランティア	17	10	援助	27

(3) 対応分析による学生の「社会福祉」に対する印象の傾向

第1回目及び第14回目の講義時の「社会福祉」に対する印象における対応分析の結果を図1に示した。内容の解釈においては、抽出語が自由記述の中でどのように使用されていたのかを確認しながら行った。第1回目の講義時における「社会福祉」に対する印象は、「高齢」、「老人」、「障がい」

に対する「サービス」や「サポート」または「介護」、もしくは「高齢」や「障がい」の人たちに対する「施設」や「制度」というものであった。第14回目の講義時には「社会福祉」に対して、「児童」、「虐待」、「貧困」、「家庭」や「親」といった印象が見られた。そのほか、「援助」、「考える」、「学ぶ」、「知る」といった印象も見られた。

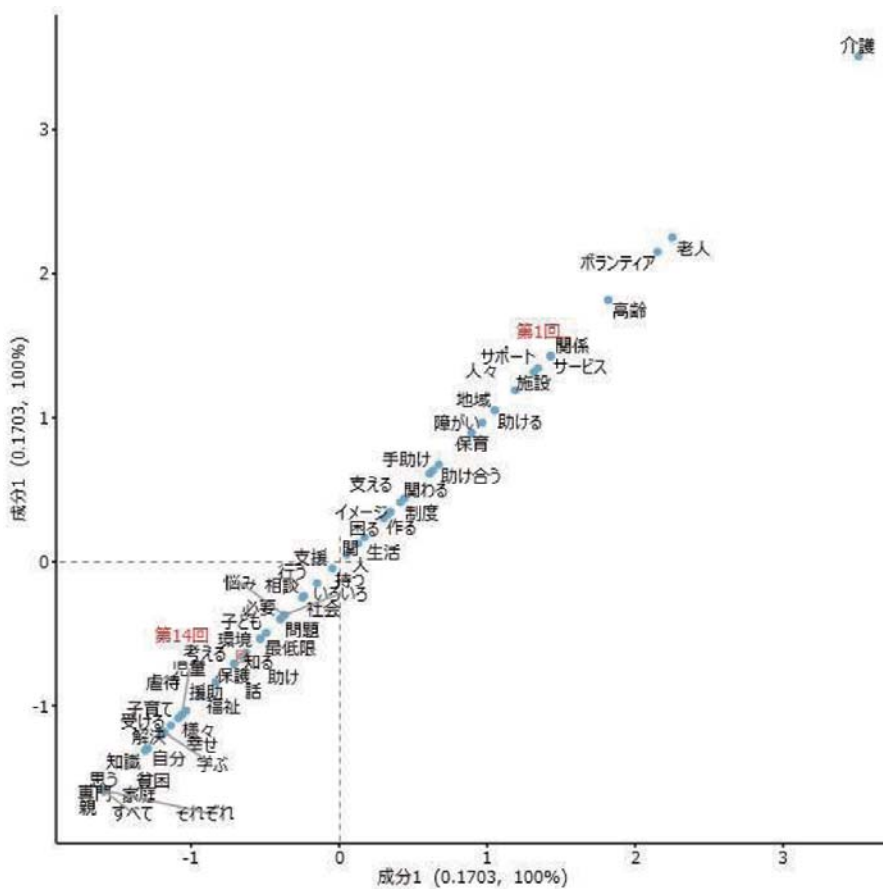


図1 第1回目及び第14回目の講義時の「社会福祉」に対する印象

(4) 語の共起関係の探索

第1回目及び第14回目の講義時の「社会福祉」に対する印象における共起ネットワーク分析を行った。なお、分析にあたっては、出現数による語の取捨選択に関しては、最小出現数を10、共起関係(edge)の種類を語一語、描画する共起関係(edge)の選択を上位60に設定した。

第1回目の講義時における「社会福祉」に対する印象を共起ネットワークに表し、図2に示した。サブグラフ検出による出現パターンは、3つのグループに分かれた。1つ目に、「人」、「社会」、「困る」、「助ける」、「制度」のサブグラフ、2つ目に、「高齢」、「支援」、「ボランティア」、「障がい」、「子ども」のサブグラフ、3つ目に、「生活」、「サポート」、「施設」、「イメージ」、「人々」のサブグラフである。

「サポート」、「相談」のサブグラフである。これらをもとに、KH coderのKWICコンコーダンスを使用し、語の文脈を確認しながらグループ名の分類を行った。1つ目では、「困っている」「人」を「助ける」といった印象や、「人」を「助ける」ための「社会」での「制度」という印象であり、【社会で困っている人を助ける制度】と命名した。2つ目では、「高齢者」や「障がい者」や「子ども」を「支援」といった印象や、「ボランティア」活動自体といった印象であり、【社会的弱者へのボランティア】と命名した。3つ目では、「生活」に困っている人を「サポート」したり「相談」にのったりするといった印象であり、【生活への支援】と命名した。

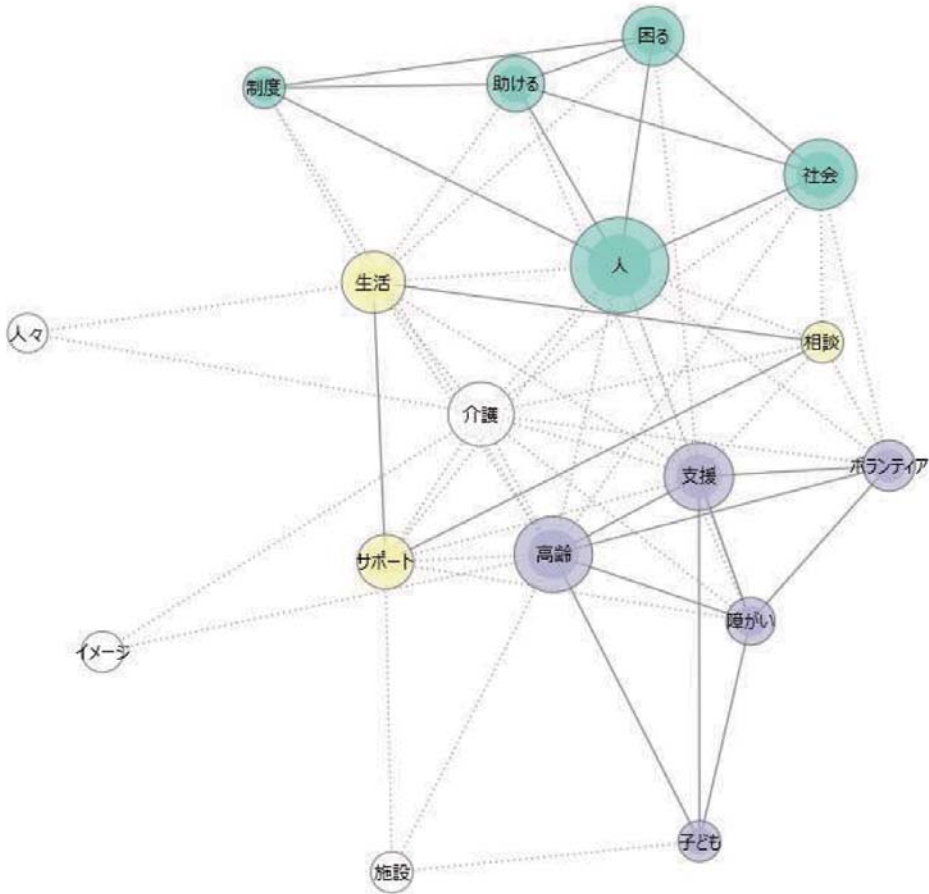


図2 第1回目の講義時の「社会福祉」に対する印象

第14回目の講義時における「社会福祉」に対する印象を共起ネットワークに表し、図3に示した。サブグラフ検出による出現パターンは、8つのグループに分かれた。1つ目に、「人」、「社会」、「支援」、「生活」、「福祉」、「困る」、「助ける」、「補助」のサブグラフ、2つ目に、「問題」、「解決」のサブグラフ、3つ目に、「高齢」、「受ける」のサブグラフ、4つ目に、「虐待」、「貧困」、「家庭」のサブグラフ、5つ目に、「親」、「子育て」、「様々」のサブグラフ、6つ目に、「話」、「聞く」のサブグラフ、7つ目に「専門」、「知識」、「すべて」、「いろいろ」のサブグラフ、8つ目に、「学ぶ」、「必要」、「思う」のサブグラフである。これらをもとに、KH coderのKWICコンコーダンスを使用し、語の文脈を確認しながらグループ名の分類を行った。1つ目では、「困っている」「人」を「助ける」といった印象や、対「人」「援助」といった印象、「社会」「福祉」によって「生活」を「支援」するといった印象であり、【対人援助による

生活支援】と命名した。2つ目では、社会「問題」の「解決」や「困っている」「人」と一緒に「問題」「解決」をするといった印象であり、【問題解決】と命名した。3つ目は、少子「高齢」化への印象や、支援を「受ける」、相談を「受ける」といった印象であり、【少子高齢化による相談援助】と命名した。4つ目では、悩みや「話」を「聞く」といった印象であり、【傾聴】と命名した。5つ目では、「親」は「様々」な「子育て」の悩みを持っているという印象であり、【保護者の子育て不安】と命名した。6つ目では、「虐待」や「貧困」の「家庭」への印象であり、【虐待や貧困の家庭】と命名した。7つ目では、「いろいろ」な「専門」「知識」が「すべて」の人に必要という印象であり、【専門知識】と命名した。8つ目では、知識や援助が「必要」であるといった印象や、社会福祉を「学ぶ」ことで様々なことを「思う」ことができたという印象であり、【学びの必要性】と命名した。

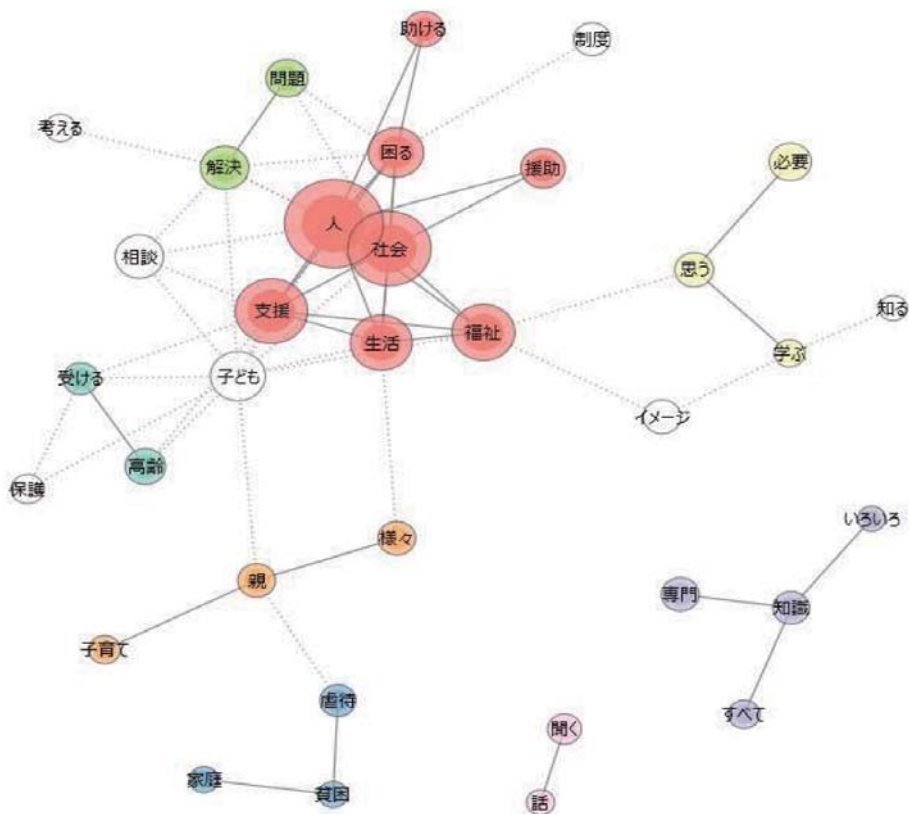


図3 第14回目の講義時の「社会福祉」に対する印象

IV. 考察

(1) 「社会福祉」に対する印象の全体的な変化

第1回目と第14回目の講義時における「社会福祉」に対する印象の総抽出語はおよそ2.5倍、異なり語数はおよそ2倍となり、第1回目から第14回目の講義において、語彙数が増えたことは、知識の獲得を意味する。

頻出語について、第1回目と第14回目の講義時における「社会福祉」に対する印象の双方に挙げられていた語は、「人」、「社会」、「支援」、「生活」、「困る」であり、「社会生活で困っている人を支援する」といった認識は統一していた。広辞苑では、社会福祉とは、「貧困者などの生活を保障し、心身に障害のある人々の援助などを行なって、社会全体の福祉向上をめざすこと」と記載されており、本研究における保育者養成校学生の印象も一般的な社会福祉の印象と相違はなかった。しかし、第1回目の講義時のみの頻出語で、「高齢」、「介護」、「サポート」、「ボランティア」であった語が、第14回目の講義時のみの頻出語では、「福祉」、「解決」、「相談」、「援助」に変化していた。つまり第1回目の講義時には、高齢者の介護や高齢者のサポート、ボランティア活動といった印象に対し、第14回目の講義時には、問題の解決や相談援助など、ソーシャルワーク技術に関連する語が多く示されていた。その変化は、対応分析や共起ネットワーク分析でも同様に示されている。

第1回目の講義時の対応分析では、「高齢者や老人、障がい者に対するサービスやサポートまたは介護」といった印象や、「高齢者や障がい者の施設や制度」といった印象であった。また共起ネットワーク分析では、【社会で困っている人を助ける制度】、【社会的弱者へのボランティア】、【生活への支援】との印象であった。これらの結果を見ると、第1回目の講義時には、社会福祉の対象は高齢者や障がい者と捉えており、一般的な保育の対象とされる児童や子どもといった語は出ていなかった。制度や政策、ボランティアや支援といった語は表出されているものの、それを自身が学修して活用していくといった認識は表出されていなかった。リアクションペーパーの内容からも、「保育士がなぜ社会福祉を学ばなければならない

のかわからなかった」「保育士に社会福祉は必要ないと思った」「どうして社会福祉を学ばないといけないのか不思議だったし、興味なかった」「保育に何も関係ないと思って、正直面倒くさいと思った」等、社会福祉の講義受講前から保育者養成学生に社会福祉の学修は不要と明確に捉えている傾向があることから、保育者養成校学生にとって社会福祉をあまり身近に感じておらず、子どもや児童に関連する内容は学ばないと認識しており、学修の必要性を十分理解していないことが推察される。

一方、第14回目の講義時の対応分析では、「児童虐待や貧困家庭及び親」に対する理解へと認識の幅が広がっていた。また、「援助」、「考える」、「学ぶ」、「知る」といった学生自身の主体的な学びに対する語が表出されていた。共起ネットワーク分析では、【対人援助による生活支援】、【問題解決】、【少子高齢化による相談援助】、【傾聴】といった、ソーシャルワーク技術に関連する語が表現されていたり、【保護者の子育て不安】、【虐待や貧困の家庭】といった子育て環境をめぐる現状における課題についても理解を深めていたりした。さらには、【専門知識】、【学びの必要性】といった学修の質の向上に対する意欲や主体的に学ぶ意識も表出されていた。

(2) ソーシャルワークの理論と技術の重要性

【対人援助による生活支援】、【問題解決】、【少子高齢化による相談援助】、【傾聴】といった、ソーシャルワーク技術に関連する印象が増えたことは、「社会福祉」において相談援助の重要性が理解されたと推察される。武藤⁹⁾は、保育士養成カリキュラムにおけるソーシャルワーク関連科目の重要性について述べている。中でも、「社会福祉」講義について、「社会福祉における相談援助という専門性の深い保育ソーシャルワークの理論と実践について教わるが、教員によってはソーシャルワークの部分のウエイトが非常に低くなってしまっておそれもあり、相談援助の基本を本当にしっかり学ぶことが重要」との見解を示している。本講義においては、社会福祉士養成課程でも教授する内容のうち、基本的な相談援助演習を積極的に取り入れた。相談援助技術を含むソーシャルワークに関連した部分について3講費やし、面接にお

ける基本的応答技法や非言語コミュニケーション、バイスティックの7原則等ソーシャルワーク技術の基本を学修した後に、ケースメソッドの活用や事例を用いてロールプレイングの導入、社会生活に関連する事象について課題解決型のアクティブラーニング等を取り入れた構成とした。実際にこの方法に学修効果があったかは本研究では明らかにできないものの、リアクションペーパーでは、「演習を通して自分の足りない部分や反省点がわかった」、「演習を経験して保育者になった時に対応ができるようにしたいと思った」、「演習をやってみて、保護者が子育てに自信を持ち、喜びを感じられるようにするかが大切だと思った」、「もっとこのような演習をたくさん行いたい」などの意見が聞かれた。一方で、保育者がどこまでソーシャルワークを担うか議論がされている⁵⁾⁶⁾ことから、保育者養成校学生にソーシャルワーク技術がどの程度重要と示されているか注視するとともに、保護者支援を含めた対人援助技術の重要性も加味しながら、講義構成を検討していく必要があると考えられた。丸目⁷⁾は、学生のソーシャルワークに対する意識と意欲を調査しているが、意識と意欲には差があると示している。ソーシャルワークを専門とする社会福祉系教員が「社会福祉」の授業内容の質を大幅に充実させることの重要性について示唆⁸⁾されていることから、対人援助専門職である保育者に必要なソーシャルワーク技術とは何かを常に検討していきながら講義を構成する必要があると考えられた。

(3) 社会と福祉の循環

【保護者の子育て不安】、【虐待や貧困の家庭】といった子育て環境をめぐる現状における課題に関連する印象が増えたことは、「社会福祉」において、社会問題も重要であると認識が深まったと推察される。井上⁸⁾は、「社会福祉」講義について、専門職養成に留まらず、「学生が学生生活だけでなく、現在から将来に渡って社会生活を送る上で有用な知識や技術を学ぶ科目」と述べている。保育課程における社会福祉の目標及び教授内容には、「現代社会」、「少子高齢化社会」、「共生社会」、「社会保障」といったキーワードがあり、社会生活についても教授することが求められている。社会生活とは、学生自身の生活も含んでおり、学生

の生活に関連する事例を多く含めた内容で構成することで、学生は社会についてより身近に感じることが可能となると考える。そのため、講義内では、学生が活用してきた社会保障制度について、実際に使用している医療保険証を持ち寄って確認をしたり、これまで活用してきた社会保障制度を具体的に挙げて振り返ってみたりと、学生が体験した事実を元に講義を構成して説明する部分も導入した。リアクションペーパーの内容には、「社会福祉がなくては私たちの生活は成り立たないと思った」、「社会について学んだ時にこれも保育にとって必要だなと感じた」、「社会について学ばなければ支援助もできなくなってしまう」、「社会福祉って身近で大切」、「私は母子家庭で手当などをもらい、社会福祉の制度を使いながら生活してきたとわかった」、「いつも病院で使っている保険にこんなにいろいろな種類があるとは知らなかった」等の感想が書かれていた。まずは社会を身近に感じ、その上で社会問題についても考え、保育者にとって社会問題は仕事に直結する事象であるとも捉えることが可能となるのではないかと考えて全体を構成した。そして自身の日頃の社会生活に関連する話題を取り上げながら、福祉的な視点や相談援助技術に絡めた内容とし、「社会」と「福祉」を融合させて理解を深めることで、福祉についての学修も深めていき、「社会福祉」全体を理解することにつながるのではないかと推測する。社会問題が他人事ではなく、身近な問題であることや学生自身にも関連するという点を学生に認識させることが講義の大きなポイントであると推察される。今後は、宮沢⁹⁾のように、新聞を活用しながらリアルタイムな社会問題を取り上げることや、井上⁸⁾のようにDVDを活用してよりわかりやすく教授することも参考に、講義を構成する必要があると考えられた。

V. 本研究の限界

今回は、講義前後における「社会福祉」に対する印象の変化を確認するとどまっておらず、講義のどのような内容に効果があったのかという部分までは明らかにできていない。また、講義における学修効果を探ることで、より質の高い講義を構成することが可能となる。さらに、学修効果の持

続性についても検討が必要である。今後は、学生の学修効果の検討を通じて、次年度以降の講義の改善に取り組んでいきたいと考える。

謝辞

本研究を行うにあたり、調査にご協力くださいましたA短期大学の学生の皆様に心より感謝申し上げます。また、健康科学大学 看護学部の望月宗一郎先生、独立行政法人 地域医療機能推進機構 山梨病院 地域医療連携室の中村成一郎さんには多大なるご支援をいただきましたことを、心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 田家英二. 保育士養成と社会福祉. 鶴見大学紀要, 50, 67-72, 2013.
- 2) 社会福祉士養成講座編集委員会. 児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度. 中央法規出版
- 3) 樋口耕一. 社会調査のための計量テキスト分析. ナカニシヤ出版. 2014.
- 4) 武藤大司. 保育士養成カリキュラム改正におけるソーシャルワーク関連科目の論点整理. 安田女子大学紀要. 48, 107-116, 2020.
- 5) 熊坂聡. 2016年公開研究会報告「保育ソーシャルワークの必要性」. 宮城学院女子大学発達科学研究. 18, 72-76, 2018.
- 6) 山本佳代子. 保育ソーシャルワークに関する研究動向. 山口県立大学学術情報. 6, 49-59. 2013.
- 7) 丸目満弓, 立花直樹. 保育士をめざす学生のソーシャルワーク行に関する意識および意欲についての一考察. 兵庫大学短期大学部研究集録, 46, 63-77, 2012.
- 8) 井上直子. 社会福祉教育としての講義の実施効果の測定. 大阪大谷大学紀要. 49, 23-39, 2015.
- 9) 宮沢和志. A大学における保育士養成課程の中で「社会福祉」を学ぶ効果的な教育方法の検討－学生たちの成長の過程をコメントシートから分析し, コメントシート交流の有効性を実証する－. 金城学院大学論集 社会科学編, 13 (1), 60-84, 2016.

参考文献

- 1) 赤尾祐子, 荒木晴美, 牛田篤. 多職種連携教育実践における学生の意識変化－テキストマイニングを用いた分析から－. 共創福祉. 10 (2), 1-8, 2015.
- 2) 天賀谷隆, 野口貴史. 精神科急性期病棟の職種間における多職種連携の捉え方の相違－計量テキスト分析による検討－. 日本医療マネジメント学会誌. 22 (2), 82-86, 2021.
- 3) 大谷京子. 精神科病院に所属する多専門職の役割認識とクライアントとの関係性. 精神障害とリハビリテーション. 9 (2), 171-177, 2005.
- 4) 小野陸, 清水寛子, 岡田繁雄, 他. 認定こども園・保育所職員オンライン研修の効果－講座振り返りコメントのテキストマイニング分析から－. 柳城こども学研究. 4, 1-6, 2020.
- 5) 片岡靖子, 坂本明子, 福山裕夫, 他. 「災害福祉

- 論」講義の評価および今後の課題－受講学生への質問紙調査から－. 久留米大学文学部紀要社会福祉学科編. 17.18, 69-80, 2019.
- 6) 勝浦眞仁, 上田敏文. 保護者支援における保育士の抱える困難感のフェーズを探る. 桜花学園大学保育学部研究紀要. 24, 35-50, 2021.
- 7) 久米喜代美, 宮村りさ子, 塩澤史枝, 他. 保育士養成校でのグループワークによる虐待認知の変化－身近な事例を用いたロールプレイングでの検討－. 桜美林大学心理学研究. 7, 107-116. 2016.
- 8) 小久保志乃. 社会福祉士実習指導者の指導力向上に資する研修のあり方に関する一考察－テキストマイニングによる研究論文の内容分析を通して－. 新潟青陵学会誌. 15 (1), 34-45, 2022.
- 9) 越中康治, 廣瀬真喜子, 松井剛太, 他. 障害のある幼児の保育に関する保育者の意見－テキストマイニングを用いた職種による特徴の検討－. 宮城教育大学情報処理センター研究紀要. 21, 33-38, 2014.
- 10) 小林理, 中原慎二, 新保幸男. 社会的養護における専門職の人材育成に関する実態と課題. 厚生の特徴. 67 (8), 33-39, 2020.
- 11) 小松啓. 社会福祉援助技術演習における学生参加型授業の実践. 中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要. (6), 149-155, 2005.
- 12) 佐々木由美子. 「保育者論」の授業による保育者養成学生の学び－テキストマイニングを使った学生の「保育観」可視化の試み－. 足利短期大学研究紀要. 42, 7-15, 2022.
- 13) 島澤ゆい. 体験学習の導入による保育を学ぶ学生の障害理解に関する一考察. 名古屋女子大学紀要. 67, 185-192. 2021.
- 14) 實川慎子, 久留島太郎. 保育者養成校と附属園における協働的教育の試み－学生による3歳児の教材作成を通して－. 植草学園大学研究紀要. 14, 17-26, 2022.
- 15) 白神晃子, 白神敬介. 福祉系短大における「障害」イメージの変化にみる学修成果の質的検討. 人間の福祉. 35, 47-62, 2021.
- 16) 杉野寿子. 保育者のソーシャルワークに関する意識調査からの一考察. 福岡県立大学人間社会学部紀要. 27 (2), 89-98, 2019.
- 17) 鶴宏史, 中谷奈津子, 関川芳孝. 保育所における生活課題を抱える保護者への支援の課題－保育ソーシャルワーク研究の文献レビューを通して－. 武庫川女子大学大学院教育学研究論集. 11, 1-8, 2016.
- 18) 治部哲也, 小山秀之. 保育士のストレスに関する質的研究－テキスト・マイニングを用いた職場のストレスの分析－. 関西福祉科学大学EAP研究所紀要. 14, 25-31, 2020.
- 19) 中村和彦, 畑亮輔. 地域包括支援センターにおける精神保健福祉士の役割と業務－4職種のグループインタビューに対するテキストマイニング分析から－. 北星学園大学社会福祉学部北星論集. 52, 145-157, 2015.
- 20) 中村尚紀. 主任介護支援専門員からみた急性期病院の医療ソーシャルワーカーとの連携の現状と課題. 共創福祉. 15 (1), 1-12, 2020.
- 21) 日和恭世. ソーシャルワーカーの実践観に関する一考察－テキストマイニングによる分析をもとに－. 別府大学紀要. 55, 73-83, 2014.
- 22) 三浦修. 福祉系大学における災害ソーシャルワークに関する授業科目のシラバス分析. 新潟青陵学会誌. 14 (2), 1-10, 2021.
- 23) 宮崎隆穂, 吉川明守, 宮越敏夫. 保育系短大生における施設実習後の施設イメージの変化. 新潟青陵大学短期大学部研究報告. 38, 175-181, 2008.